

[32] ボリショイ・オペラ

勇猛な『ジャンヌ・ダルク』

1995年6月23日 東京新聞 夕刊

いま来日中のボリショイ・オペラは『エフゲニー・オネーギン』『ジャンヌ・ダルク』『イーゴリ公』の三つの作品を持ってきているが、今年三月にモスクワで見たときには『ジャンヌ・ダルク』に最も興味をそそられた。これは今回が日本初演のオペラだが、作曲のチャイコフスキーが特に心を砕いた作品だったようだ。

面白いのは主人公のジャンヌのとらえ方である。英仏の百年戦争で祖国フランスを救ったオルレアンの少女のことをフランスでは純真でか弱い田舎娘だと考えるのが一般的である。十九世紀の歴史家ミジュレーの『ジャンヌ・ダルク』も二十世紀の詩人クローデルの『火刑台上のジャンヌ』も、みな彼女を勇猛とは無縁の乙女だというふうに設定している。だからこそ甲冑を着て軍に勝利をもたらすという行為の意外性がドラマなのだ。

が、チャイコフスキーがイメージしたジャンヌは違っている。作曲家はドイツの詩人シラーの戯曲に想を得て、自ら脚本の筆を取った。そしてジャンヌを男性的で力強い女性に仕立てあげたのである。フランスとドイツの精神性の違いに加えて、ロシア・オペラの特徴や作曲家の趣味ということも考え合わせると、ジャンヌという人物像に関する解釈の差がなかなか興味深く思われる。チャイコフスキーは主役の歌手を求めておおいに頭を悩ませたらしいが、三月にモスクワで聴いたジャンヌ役のウダーロワは、オーデイションで選ばれたというだけあって、恰幅

[32] ボリショイ・オペラ

勇猛な『ジャンヌ・ダルク』

1995年6月23日 東京新聞 夕刊

のいい容姿もさることながら声量も抜群、チャイコフスキーの希望にもかなったにちがいない。

このオペラは演出と装置が素晴らしい。全幕を通じて、舞台中央に四角の置き舞台をしつらえ、その上で繰り広げられる主要人物の動きを周囲の合唱が見守っている。ちょうどギリシャ悲劇のコロスのように合唱隊が観客の代表という感じで、見ている私たちも事件を覗き込んでいる気分になるのである。あるいは自分も参列している宗教劇といったらいのだろうか。

たとえば第二幕。暗紅色の衣をまとった貴族たちが二階の回廊にずらりと並んだところは中世の宗教画さながらで、そこから壮麗な大合唱が湧き起ると、カテドラルのなかにいるような錯覚に陥ってしまう。そして終幕のジャンヌの昇天は、眼を射る光線とスモークが入り乱れるなかでの宙吊りとなるのだが、このスーパー歌舞伎ならぬスーパー・オペラが中世聖史劇ふうの厳肅な雰囲気乱さないその程の良きたるや、じつに何とも見事である。

今回の日本公演は三作品ともポクロフスキーの演出によるものだが、どれもまったくコンセプトや雰囲気が違う。ポクロフスキーという人は、音楽を聞いているとそれが視覚的な映像に置き換えられて瞼の裏に浮かんでくるのだそうだ。舞台芸術ならではの効果をもたらす才能とは、そのように視覚と聴覚が一体になったものなのかと感嘆させられた。

[32] ボリショイ・オペラ

勇猛な『ジャンヌ・ダルク』

1995年6月23日 東京新聞 夕刊

ここは個性的な踊り手が多いが、わけても芸術監督のパトリック・デュボンのスター性は、世界のバレエ・ダンサーのなかでもちよつと類がない。

昔からパリ・オペラ座バレエのトップというのは華やかな人が多かった。もとはと言えばルイ十四世のバレエの先生だったボーシャンが、バリ・オペラ座バレエが制度化されるにおよんで劇場の指揮にあたったわけだから、宮廷生活の雰囲気をも身につけていたのだろう。

十七世紀の末に芸術監督(メートル・ド・バレエ)だったルイ・ペクールという人は、社交界のもてもて男で、ある時、さる將軍と貴婦人の愛を争うはめになった。具合の悪いことに、二人は彼女の控えの問で鉢合わせしてしまう。將軍はさつそうとしたペクールを見て軍人だと思い「君はこのコール(隊)かね」とたずねた。ペクールは「閣下が長らく仕えておいでのコール(体)でございます」と答え、このエスプリが社交界で大評判になったという。コールという言葉の二重の意味をもてあそんだわけだが、実のところは、ペクールはオペラ座でコール・ド・バレエを指揮していたのだ。

十八世紀のガエタン・ヴェストリスも威勢のいい

[32] ボリショイ・オペラ

勇猛な『ジャンヌ・ダルク』

1995年6月23日 東京新聞 夕刊

男で、人気も高かったが、言うことも不遜。「ヨーロッパには偉大な男は三人しかいない。フレデリック大王とヴォルテール氏、そして私だ」という名文句を後世に残したが、これにはさすがに世の人も首を傾げたらしい。

* * *

当代のデュポンを見てみると、こういう大先立ちを思い出す。というのも、彼もまたとにかく目立つ人だからである。バレエ学校の時代には「オペラ座のアンファン・テリブル」と異名をとった。コクトーの小説の『怖るべき子供たち』のことで、その主人公たちのように美貌と才能にあふれ、凡庸な世俗を見下して傍若無人にふるまうということである。それでいて成績はつねにトップだった。

学校を卒業して入団したのが十六歳。翌年、国際ヴァルナ・バレエコンクールで金賞とグランプリをダブル受賞する。その後、パランシンの『放蕩息子』、ノイマイヤーの『ヴァツラフ（ニジンスキー）』、ベジャールの『ボレロ』などを踊って話題となり、主役クラスのエトウルに昇進したのが八〇年。二十一歳というオペラ座最年少記録である。

とはいっても、いつも一番でなければ気の済まない性格は、たしかに舞台人でなければちょっとテリブルであったかもしれない。三年ごとに開かれる世界バレエ・フェスティバルでも、並み居る世界のスターたちのなかで彼デュポンだけは、舞台でもパーティーでも、特別な存在であることを印象づけずには

[32] ボリショイ・オペラ

勇猛な『ジャンヌ・ダルク』

1995年6月23日 東京新聞 夕刊

おかないのだ。しかし飛び切りの笑顔と人をそらさぬ機転で、ふしぎに不快と感じさせない。

* * *

そんな彼も、ヌレエフがパリ・オペラ座バレエの芸術監督に就任した八三年からの数年は、いきさかうつとしい気分だったのではないかと思う。どちらにも人にゆずらぬ天才肌の人間だというだけでなく、芸風もメソードも作品の好みもまったく違っていったからである。デュボンはフランス風に軽妙で明るい、ヌレエフはロシア風にダイナミックで、舞台の作りも重厚なのを好んだ。おそらくはそういう葛藤もあって八七年、デュボンはバリーを去ってナンシー・バレエの芸術監督になる。

九〇年に彼がパリ・オペラ座の芸術監督になった時、オペラ座にまたフランスらしさが戻ったと喜んだフランス人は多かったにちがいない。事実、今のパリ・オペラ座バレエは、企画にも舞台にもまたダンサーたちの表情にも、エスプリとエレガンスがあふれている。

なかでもデュボンの舞台はいつも観客相手のゲームである。なにしろ茶目っ気たっぷりな仕組んであるから、かなわない。そうは乗せられてなるものと構えていても、いつも気がつくど熱狂的に拍手させられていて、くやしい思いをする。今度こそは、と毎回思っ劇場にでかけるのだが…。